

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：12611

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13200

研究課題名(和文) 謡伝書の日本語学的研究

研究課題名(英文) The Japanese Linguistic Study of Utai Densho

研究代表者

竹村 明日香 (Takemura, Asuka)

お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授

研究者番号：10712747

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では鴻山文庫に所蔵されている謡伝書を調査し、室町末～近世期に作成された謡伝書には発音に関するどのような記述が見られるかを調査した。その結果、『塵芥抄』系伝書の記述が最も流布していたことが明らかになった。『実鑑抄』系伝書もそれに次いで影響力の大きかったものであり、発音規範を広めるのに一定の役割を果たしたと見られる。

謡伝書では、助動詞やいろは歌に胡麻章を附してアクセントを示す記事や、濁音前鼻音について記す記事が見られた。また『塵芥抄』の四声観を契沖や本居宣長が著書に取り込んでいることも判明した。謡伝書に集積された知識は「発音規範の拠りどころ」として近世期に受け入れられていたと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、従来、近世の版本までしか調査されてこなかった謡伝書の日本語学的研究を写本の領域にまで拡大した点にある。これにより近世の謡伝書の記述は独自性の強いものではなく、それ以前の謡伝書の記述を継承していることが判明した。また、近世期の謡伝書には引き継がれなかった発音規範に関する記述も多数存在することが明らかになった。

社会的意義としては、日本の伝統芸能の一つである能の一領域に一定の貢献をしたことが挙げられる。能の謡は今日も多くの人々が嗜んでいる。中近世の日本人が謡の発音のどのような点に留意していたかを知ることは、今日謡を嗜む人々にとっても有益な情報であり、大きく役立つものと思われる。

研究成果の概要(英文)：This study examined the utai densho (chanting transmission books) preserved in the Kozan Bunko collection to investigate the descriptions related to pronunciation found in utai densho created from the late Muromachi period to Edo period. As a result, it became clear that the descriptions in the "Jinkaisho" lineage densho were the most widely popular. The "Jikkansho" lineage densho also had significant influence and played a certain role in spreading pronunciation norms. In utai densho, there were articles that attached sesame marks to auxiliary verbs and iroha poems to indicate accent, as well as articles that described the prenasalization before voiced sounds. It was also discovered that the concept of "shisei" (the theory of four tones) from the "Jinkaisho" lineage had been incorporated into the works of Keichu and Motoori Norinaga. The knowledge accumulated in utai densho was considered a "basis for pronunciation norms" and was widely accepted during Edo period.

研究分野：日本語学

キーワード：謡伝書 能楽 四声 日本語音韻史 塵芥抄 実鑑抄 発音 金春

## 1. 研究開始当初の背景

謡伝書は、室町時代から江戸時代にかけての発音を知ることができる口誦資料の一つとして岩淵悦太郎や亀井孝などによって早くから研究されてきた。能楽は近世に教養の一つになったこともあり、江戸時代には『音曲玉淵集』(1727年刊)などの謡の指南書が多数刊行されている。それらは素人であっても発声法や所作が会得できるように書かれたため、書中の記述から当時の日本語の発音や人々の発音に対する規範意識を探ることができる。

先行研究では、特に「じ・ぢ・ず・づ」の四つ仮名や、オ段開合音、連声などの記述を考察し、江戸期の謡伝書が中世の音声的特徴をよく伝えていることを強調する例が多く見られた。また近年は「つめる」「のむ」といった謡伝書の術語から中世の舌内入声音の特徴を明らかにしたり、仮名遣い書『蜷縮涼鼓集』(1695刊)と謡伝書『当流謡指南抄』(1696年刊)を対照させて当時の四つ仮名の特徴を解明する試みなどが行われている。

しかしこのように研究が進展している中で問題となっているのは、調査対象とされている謡伝書が江戸期の版本に限定されているという点である。写本が利用されない理由は、読解に労力がかかるといった事情だけでなく、謡伝書に奥書の書写年を偽ったものや、著者を有名人(金春禅竹・観世宗節など)に仮託した偽書が多いためである。

しかし1990年代後半以降、野上記念法政大学能楽研究所の能楽研究者らにより、室町期の謡伝書の書誌情報が整理され、成立年や著者、資料の概要がおおよそ明らかになった。よって今後はこれらの成果に基づいて、室町期の写本の謡伝書を日本語学の観点から捉え直す時期来到ると言える。

## 2. 研究の目的

本研究は、主に以下の問いに答えることを目的とする。

- I. 室町期の謡伝書にはどのような音声学的記述があり、それらは江戸期の版本の謡伝書にどのように受け継がれているのか。
- II. 室町期の日本語音声を、謡伝書の記述からどこまで再構することができるか。
- III. 能楽関係者らの発音観察の実態と発音に対する規範意識は、室町期・近世期にはどのようなであったのか。

## 3. 研究の方法

研究方法としては、以下の手順で行った。

- (1) 野上記念法政大学研究所の鴻山文庫に所蔵されている室町末から近世期までの謡伝書を悉皆調査した。資料のすべてに目を通し、音声学的な記述のある部分を複写して記述のデータ整理を行った。必要に応じて他大学(早稲田大学など)の謡伝書を複写した。
- (2) 音声学的な記述が類似しているグループごとに謡伝書を分けて、伝書の系統関係を整理し、記事の伝承関係について考察した。
- (3) 音声学的な記述の中から特に、アクセント、いろは歌、四声、濁音前鼻音について書かれているものを研究対象として取りあげ、それぞれに考察を加えた。
- (4) 独自性の強い記述が見られる謡伝書はそれ単体を取り上げて考察を加えた。

## 4. 研究成果

研究成果として、以下の5点を明らかにすることができた。

- (1) 音声学的な記述から謡伝書の系統を分けると、おおよそ、『塵芥抄』系、金春伝書系、『実鑑抄』系、その他の4系統に大きく分けることができることが判明した。これらのうち後世に最も大きな影響を与えたのは『塵芥抄』系伝書である。近世期に流布した『謡之秘書』などがこの系統に属しており、『塵芥抄』の音声学的記述を巷間に広めるのに大きな役割を果たしたと考えられる。また、近世に権威書として知られた真嶋円庵の『実鑑抄』系伝書も、『塵芥抄』系伝書の内容をしばしば抜粋して記載しており、これらの書も謡の発音規範を広めるのに大きな役割を果たしたと考えられる。
- (2) 胡麻章を用いて打消の助動詞「ぬ」(＝ズの連体形)と完了の助動詞「ぬ」のアクセントの差異について論じる記事について分析を加えた。その結果、この記事は、『混沌懐中抄』、『塵芥抄』、『実鑑抄』などの謡伝書に見えており、いずれも打消の「ぬ」をH(高アクセント)、完了の「ぬ」をL(低アクセント)として示す傾向にあることがわかった。また、「見えぬ」「たえぬ」のような「ぬ」に前接する動詞の部分も含めてアクセント分析を行ったところ、

これらは近世期のアクセントとほぼ一致することが明らかになった。伝書の中には、「見えぬ」にLHLと胡麻章を附して「悪」と評価語を注記するものも見られる。これは「見えず」のアクセントで打消の「見えぬ」を発音することをたしなめるものであり、近世にて打消のズとヌのアクセントが混同していたことを示す一例であると見られる。

- (3) 契沖の『和字正濫鈔』や本居宣長の『漢字三音考』には、平声を下降調、上声を高平調、去声を上昇調で示す例が見られるが、これらは『塵芥抄』の四声観を摂取していることが明らかになった。『塵芥抄』には、平声を「月次ノ頭ナリ」、上声を「人ニ物ヲ問ウナリ」、去声を「弓ニマク藤ナリ」と記して三種の「トウ」のアクセントで各音調を例示している。これらのトウ（頭・問う・藤）のアクセントはそれぞれ下降調、高平調、上昇調であり、いずれも契沖や宣長らの四声観と一致する。宣長は少年期に謡曲を多数学んでおり、青年期も謡に関する記述を残している。彼は謡に親しむ中で『塵芥抄』の四声観を学んだ可能性が考えられる。また国学者らは日本の四声を漢国からの影響を受けていない「古ヨリ心得来レル」ものとしてとらえており、謡伝書の四声は、その彼らの求めるところに合致するものであったと考えられる。
- (4) 個別的な資料調査として『謡鏡集』の調査を行った。本書にはカ行・ガ行・ダ行などについて考察を加えた部分があり、そこには濁音前鼻音に関する記述が部分的に表れていた。本書では先行する謡伝書の記述をほぼ引用しておらず、当該部分の記述も、著者自身で口内の観察をして記したものである。近世期の濁音前鼻音の様相を記した一書として扱えるものである。
- (5) 『金春流詠口伝集 宗因袖下』附載のいろは歌及びいろは語彙について考察を加えた。本書には、胡麻章付きのいろは歌と、胡麻章付きの語彙をイロハ順に並べられたものがある。それらを分析したところ、いろは歌は先行研究で指摘されていた二通りの読み方で読まれており、また語彙はおおよそ近世期の京阪アクセントを示していることが明らかになった。

以上、謡伝書の系統を音声学的記事の観点から分類し、影響関係を明らかにするとともに、個々の記事や個々の伝書について考察を加えた。室町末期から近世にかけて謡伝書は発音に関する知識を集積しており、近世期にそれらは「発音の規範」、または「発音規範の拠りどころ」として扱われる一面があったと考えられる。国学者の学説に謡伝書の記述が摂取されている背景にもそうした社会的要因があったものと推測される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

|                                    |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>竹村明日香                   |
| 2. 発表標題<br>宣長と謡伝書 『漢字三音考』にみる四声観の撰取 |
| 3. 学会等名<br>第2回文献日本語研究会             |
| 4. 発表年<br>2023年                    |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>竹村明日香                        |
| 2. 発表標題<br>二つの「ぬ」 謡伝書の胡麻章が示し分ける打消と完了    |
| 3. 学会等名<br>第16回国際日本学コンソーシアム 日本語・日本語教育部会 |
| 4. 発表年<br>2021年                         |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|